



リシンク この街から、Rethinkして未来を変えていく。



街の課題を、考える。話し合う。

そこに住む方々、そこで働く方々、そしてそれを支える自治体の方々と一緒に。

それは、よりよい明日のために。

Rethinkフォーラムは、地域にゆかりのある方や、テーマにピッタリなゲストをお招きして、

地域社会の課題解決に向けたディスカッションをする場。

ちょっとだけ視点を変えてみることで、違った景色が見えてくるかもしれません。

この先も、この街が魅力的で活気にあふれるように。一緒に、Rethinkしませんか？

リシンク
Rethink

視点を変えて考えること。

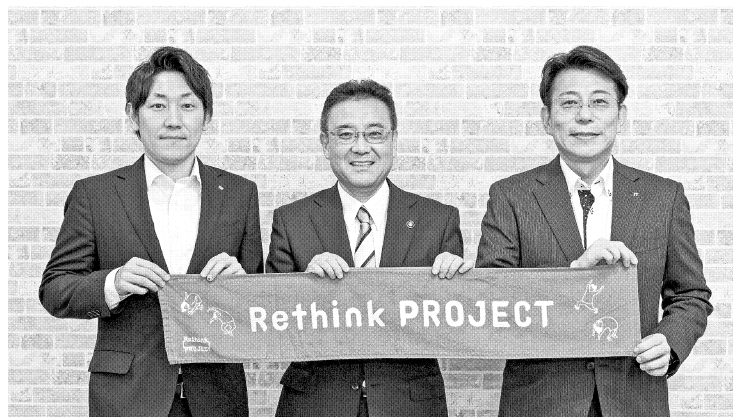


Rethink
PROJECT

テーマ

Rethink八戸 ～次世代へつなぐ、魅力あるまちづくり～

「Rethink八戸～次世代へつなぐ、魅力あるまちづくり～」をテーマにしたフォーラム(東奥日報社主催、Rethink PRO JECT協賛)が8月12日、八戸市内で開かれました。2029年に市制施行100周年を迎える八戸市は、人口減少や少子高齢化など地方都市共通の課題を抱える一方、水産業、製造業、エネルギー、文化など多様な強みも持っています。魅力あるまちを次世代につなぐために、行政、若い世代、企業がそれぞれどのような役割を果たすべきか。市長の熊谷雄一さん、八戸青年会議所理事長の田中貴大さん、日本たばこ産業(JT)青森支社長の山田敏之さんが、「Rethink」しながら語り合いました。



出席者

モデレーター



熊谷 雄一さん
(八戸市長)
1962年八戸市生まれ。日本大学法学部卒業。八戸市議会議員1期を経て、2003年から21年まで青森県議会議員を5期務めた後、同年11月市長に初当選。現在2期目。



田中 貴大さん
(一般社団法人八戸青年会議所理事長)
1987年八戸市生まれ。西武文科大学サービス経営学部卒業。2021年八戸青年会議所に入会。専務理事、副理事長を経て、26年1月に第70代理事長就任。



山田 敏之さん
(日本たばこ産業株式会社青森支社長)
1976年神奈川県横須賀市生まれ。法政大学法学部卒業。99年日本たばこ産業入社。上信越支社、神奈川支社、本社法人営業部などを経て、2026年4月から現職。

近藤 弘樹
(東奥日報社八戸支社長)
1967年大畑町(現むつ市)生まれ。90年東奥日報社入社。政経部、社会部、八戸支社などに所属。報道部長、編集局次長などを経て、2026年4月から現職。



ミモザを配り国際女性デーをPR(東奥日報社提供)

テーマ01 魅力あるまちづくり

【近藤】八戸市は2029年に市制施行100周年を迎えます。皆さんは「魅力あるまち」についてどのように考えていますか。
【熊谷】八戸市は、海とともに発展してきた歴史を持つまちです。産業、食、自然、文化、そして人の温かさが重なり合っていることが大きな魅力です。一方で、こうした魅力や強みは、ただ存在しているだけでは、本当の意味で魅力にはならないと思います。市民がその価値を知り、楽しみ、関わることで、初めて魅力として磨かれていくものです。まちづくりを実践する市民力を原動力としながら、地域に新たな価値を創造し続けることで、まちの魅力をさらに高めていくことができると思っています。その中で、特に大切にしたいのが若い世代の力です。八戸市が魅力あるまちであり続けるためには、既存の強みを守るだけでなく、それを次の世代がどう生かし、更新していくかが重要です。100周年の節目を転換点と捉え、若者が挑戦しやすい、未来を描くことができる環境づくりを積極的に進めていきます。
【田中】熊谷市長がおっしゃったように、資源だけではまちの本当の力にはならないと思います。大切なのは市民一人一人がまちの価値に気づき、もつとよくしたいと思えること。八戸青年会議所には約50年続くクラブはちのへんというスローガンがあります。その根底には「知る」とは即ち愛することであるという考え方があります。まちを知れば愛着が生まれ、自分も関わりたいという気持ちになる。まちをつくる。人だと思える。魅力あるまちとは、市民が自分もこのまちをつくる一人だと感じることだと思います。特に、若い人たちが八戸で挑戦し、自分の思いやアイデアを形にできることが大切です。そのためには、若い人が新しい価値を加えていける環境をつつていかなければいけないと思っています。
【山田】企業にとって「魅力あるまち」とは、そこに暮らす人がまちに誇りを持ち、未来に期待を持てるかが重要な要素です。そして「企業が地域にどう関われるか」という視点が、これからの時代

はより重要になると考えています。弊社も具体的な取り組みを進めており、今年3月には国際女性デーの周知のためにミモザの配布を八戸市中心街で実施いたしました。また、八戸市は葉たばこの名産地です。昨年の三社大祭では葉たばこ農家さんと共に葉たばこの魅力訴求活動も実施いたしました。魅力あるまちには、行政、企業、若者の三者が交わることで初めて立体的になるものだと思います。私たちもその一角として、地域に開かれた存在であり続けたいと考えています。
【近藤】若者に「挑戦したい」「このまちで未来を描ける」と感じてもらうためにどのようなことを重視しているのでしょうか？
【熊谷】八戸市の発展を支えてきたのは中小企業・小規模企業であり、単に地域経済を支えている存在ではなく、八戸市の産業や経済、雇用の担い手として重要な役割を果たしてきました。こうした企業が持つ技術やノウハウを次の世代につなぐためにも、起業や事業承継、第二創業への支援は非常に重要です。起業支援については、地域経済を元気にするため、新しい担い手やチャレンジする人材を育てていくことがとても重要です。商工会議所や金融機関、高等教育機関などとも連携しながら、起業家の卵が八戸でしっかりと成長できる環境を地域全体で支えていきたいと考えています。企業誘致にも果敢に取り組み、時代を担う若者が希望を持てる雇用創出と「産業界都市・八戸」の発展を実現していきます。
【田中】起業しようとした時に、相談できる人や仲間と出会えること、先輩経営者から経験やノウハウを伝えるもらえることが、そして背中を押してもらえると、次の一歩につながると思っています。また、若い人にとっては挑戦する経験を持つことが重要です。自分のアイデアが誰かの役に立つという経験が「このまちでも自分の未来を描ける」という自信につながります。起業支援に必要なのは制度や仕組みを整えることに加え、挑戦する人を地域全体で応援し、次の挑戦につながるような土壌をつくることだと思います。そうした環境が根付けば、若い世代からもっと新しい事業や価値が生まれ、八戸の魅力につながっていくと考えています。
【山田】「Rethink」の観点から見ると、「地域の魅力によって自然と企業が集まる状態を創出」することが重要だと思います。そのためには、地元企業が元気になること、挑戦が生まれていること、人材が育っていること。こうした要素が「地域のブランド」として機能していく必要があります。企業としては、地域の中で「共創する存在」になることが求められているのではないのでしょうか。9月

テーマ03 その先の未来

24日には「Rethink PROJECT」の一環で、当たり前を「Rethink」し、考えを「Create」できるクリエイターを育成する市民参加型のプロジェクト「Rethink Creator PROJECTセミナー」を八戸市にて実施いたします。今後も地域のパートナーの皆さまと共に八戸の産業基盤の強化に寄与していきたいと思っています。
【近藤】100周年のさらにその先の未来について「Rethink」の観点から語っていただけたら。
【山田】100周年という節目は、これまで当たり前としてきた前提や価値観を問い直す機会だと捉えています。企業の役割も「雇用する側」という枠組みだけではなく、「地域の中でどのような価値循環を生み出す存在なのか」「人材とどう共に成長する関係を築くのか」といった観点から再定義する必要があると感じています。若者にとって魅力あるまちとは、自分の関わりによって意味や価値が書き換えられていく実感が持てる場です。企業もまた、その「書き換え可能な余白」を共に育てる存在でありたいと思っています。
【田中】「Rethink」というのはこれまでの積み重ねを否定するのではなく、その価値を改めて見つめ直したり、時代に即した形に変えていくことだと思います。特に大切なのは、次の世代に完成されたまちを残すことではなく、自分たちで考えて挑戦し、新しい価値を生み出せる環境を残すことです。青年会議所としても市民と一緒にまちの価値を考えて、必要なものは受け継ぎ、変えるべきものは恐れずに変えていく。そして一人一人がこのまちの未来に関わり、自分たちの行動に誇りを持てる。そんな八戸を次の世代につなげていきたい。100周年をゴールではなく、その先の100年に向けて新しいスタートとして、挑戦していきたいと考えています。
【熊谷】最も重要なのは「何を残すか」ではなく「何を変えるか」。八戸は先人の努力によって困難を乗り越え、外の文化や価値を受け入れながら発展してきた。この歴史自体が「Rethink」の連続と言えます。人口減少などの課題も新しい価値を生む余地と考えると、挑戦を引き出す役割を果たしていきたい。若者が八戸に誇りを持ち、その思いを未来へつなぐ、好循環を生み出すことができるよう、若者が活躍できるまちづくりを積極的に推進し、八戸市を良い形で次の世代へつなぐ「挑戦できるまち」、100年先も誇れる魅力あるまち」を創り上げていきます。100周年を通じて生まれる挑戦やつながりを、「過性のものではなく「文化」として根付かせる。その積み重ねこそが、次の100年の八戸を形づくると信じています。